

# 悪の問題におけるアウグスティヌスの な探究の方法について

荒井 洋 一

まずはじめに、以下の私の立論が、何をねらってそこに行き着こうとしているかという目標と、どこを視座としてそこから出発しようとしているかという視点とを明らかにしておかなければなるまい。

もっとも簡略化して述べようと思う。

私は以下の論証過程において、『自由意志論』におけるアウグスティヌス的な「くり返し」を視座としてそこから出発し、「神の発見」と「悪の解明」との内的連関の根拠を目標としてそこに到着することを願っている。

確かに悪の問題におけるアウグスティヌス的な探究の成果を摘み取ることは、私たちに於ける権利であり、義務でもあろう。がしかしアウグスティヌス的な探究の成果において、それは単なる里程標にすぎないとも言える。探究することそれ自身もまた私たちに語りかけていると言えるように思われる。

悪の問題におけるアウグスティヌス的な探究が、過ぎ去ることどもを越えて、持つ生命のこの衝撃力の秘密は何か。

アウグスティヌス的な探究の「方法」(method)を探ることによって、私はその道(óðós)をたどりたい。この小論自身の探究によって、私は、悪の問題におけるアウグスティヌス的な探究の何かを見出したいと思う。

## 1. 『自由意志論』それ自身の中の「くり返し」の意味の検討

『自由意志論』の第Ⅰ巻と第Ⅱ巻を読むとそこに或る種の「くり返し」があるのに気づく。おおよそ同内容と見られる「くり返し」の基本的なものについて大意を付して記すと以下の通りである。

① I, ii, 4.-II, ii, 6: あなたがたは信じなければ理解しないだろう。② I, vii, 16.-II, iii, 7: あなた(エウォディウス)の存在・生・理解の自明性。③ I, viii,

18.-II, iii, 7: 理解・生・存在の存在秩序 (ordo)。④ I, x, 21.-II, vi, 14: 理性的な精神よりもすぐれている (esse praestantius) ものは神である。⑤ I, xiv, 30.-II, ix, 26: 幸福な生を意志することとそれに値すること。⑥ I, xv, 33.-II, xviii, 48: 物的な善きもののうちで悪用され得る何かが見出されるとしても、それらが与えられるべきでなかったとは言われない。⑦ I, xvi, 34.-II, xix, 53: 悪しく為すとは不可変な善から反転して可変的な善へと転向することである。⑧ I, xvi, 35.-II, xx, 54: 私たちは自由な意志の決定 (liberum voluntatis arbitrium) からして悪しく為す。

以上八項目のうちで《くり返し》が単に第I巻・第II巻のみならず三巻全体に亘っていると見られるものは①・③・⑤・⑥・⑦・⑧の内容である。

この《くり返し》は何を意味するだろうか。

アウグスティヌスは悪の探究の対話をエウォディウスとまさにこれから本格的に始めようとするに当たってこう言っている。

「まだ若かったころの私の心を激しく騒がせて疲れ切った私を異端者らの中に押しやり投げ倒したその問題をあなたは提起しています。その転落によって私はそれほど打ち砕かれ、空虚なお伽話のかくもおびただしい堆積によってそれほど埋没させられていたので、もし私のために真なるものを発見したいとの望みが神的な助力を獲得しなかったなら、そこから立ち上がりそして探究する第一の自由自身へと私が蘇生することはできなかったでしょう。そして私はその問題から解放されるために情熱を傾けたのですから、それに従って私が免れるに至ったその順序 (ordo) によって私はあなたと議論を進めて行きましょう。」(I, ii, 4.)

「順序」が注目を引く。

かつてアウグスティヌスが悪の問題から解放されるためにたどった原思索・原探究過程、それは何だったろう。

この「順序」が《くり返し》①の「あなたがたは信じなければ理解しないだろう」に相関して、はじめにまず信じる事、ついで理解すること、の順序を指しているにせよいなにせよ、あの《くり返し》は、やはり、どのような順序で理解したのかというアウグスティヌス的な探究の事実性を指示しているのではないだろうか。

## 2. 『自由意志論』と『告白』第VII巻との比較

『告白』第Ⅶ巻第3章から第16章にかけて、アウグスティヌスはかつての悪の探究過程をふり返っている。ここで『告白』第Ⅶ巻と『自由意志論』を比較することは意義あることであると信じる。(とは言え、『自由意志論』の探究の事実性を立証するための、それは十分な手続きでなくて、初期著作群における検討が必要であることを私は認める。)

Conf. VII, iii, 4: ①神の不可滅性を信じて悪の原因を探究すること。(De lib. arb. I, ii, 4と対応) VII, iii, 5: ②悪しく為す原因は自由な意志の決定であり、悪をこうむる原因は神の正しい審判であるという言葉を理解すること。(De lib. arb. I, i, 1) ③自己生存の知。(De lib. arb. I, vii, 16) 意志保有の知。(De lib. arb. I, xii, 25) ④意志する主体は私であり、そこに罪の原因があること。(De lib. arb. I, xvi, 35) ⑤意に反して為すことは為すと言うよりむしろこうむっているのであり、罪ではなくて罰なのであって、しかも神によって正しく罰せられていること。(De lib. arb. I, xi, 22) ⑥どこから(Unde)私は悪しく意志するか。私を造ったのは善そのものである神だというのに。(De lib. arb. I, ii, 4; xvi, 35; III, i, 1; xvii, 47) ⑦神の不可滅性に対する信念の保持。(De lib. arb. II, ii, 6, III, ii, 5) VII, iv, 6: ⑧神は不可滅でなければならない。不可滅なるものの場所に神を尋ねなければならない。(De lib. arb. II, vi, 14) VII, v, 7: ⑨悪はどこから生じるか。⑩被造物と神の形体(corpus)的な想像。⑪悪はどこから生じるか。⑫至高の善である神がより小さな善を造ったのであり、造ったものも造られたものもすべて善である。⑬悪はどこから生じるか。それとも質料が悪いのだろうか。⑭教えの規範(norma doctrinae)をはずれて動揺していたがそれを捨て去ることはなかった。VII, vii, 11: ⑮悪の探究と神への信仰との相克・葛藤・動揺。神は在り、神の存在(substantia)は不可変であるという信仰からは引き離されなかったけれども。VII, x, 16: ⑯不可変の光(lux incommutabilis)としての神の発見。(De lib. arb. II, xi, 30) VII, xi, 17: ⑰被造物の在り方。(De lib. arb. II, xvii, 46) VII, xii, 18: ⑱悪は存在(substantia)ではない。(De lib. arb. III, xiii, 36) VII, xiii, 19: ⑲神にとって、またすべての被造物にとって、悪はない(non est)。被造物全体としての見地から神は讃えられる。(De lib. arb. III, v, 13) VII, xvi, 22: ⑳不義(iniquitas)とは、至高の存在である神から転じ、自己の内的なもの

を投げ捨て、外へふくれあがってもっとも低いものに向かう意志の錯倒 (*perversitas voluntatis*) である。( *De lib. arb.* III, xxv, 76)

以上の比較から、『自由意志論』第Ⅰ巻の探究過程が『告白』第Ⅶ巻第3章によって、また『自由意志論』第Ⅱ巻・第Ⅲ巻の探究過程の大筋が『告白』第Ⅶ巻第4章・第10章・第11章・第12章・第13章・第16章によって、それぞれ裏づけられているとすることができるように思う。

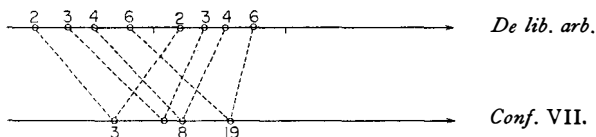
『自由意志論』の探究は基本的にはアウグスティヌス自身の探究がもたらしたものであるのであって、エウディオスの異論提出が大筋をねじ曲げたということはないだろう。

あの「くり返し」が或る種の事実性を指示しているということのひとつの意味がここにある。①から⑧までのあの「くり返し」のうちで、可能的にも『告白』第Ⅶ巻の文脈に位置づけられないと思われるものは⑤の「くり返し」だけである。

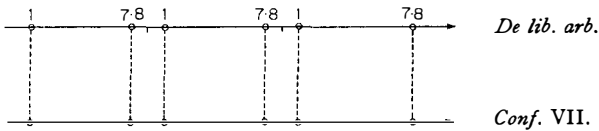
### 3. 『告白』第Ⅶ巻それ自身の中の「くり返し」の意味の検討

しかしあの「くり返し」のうちの或るものはもっとそれ以上の事実性を指示しているだろう、ということが『告白』第Ⅶ巻それ自身の中の「くり返し」との比較によって、さらに、わかる。あの「くり返し」の②・③・④・⑥は『告白』第Ⅶ巻の文脈のうちに一回的にしか位置づけられないが、「くり返し」の①と⑦—⑧は数回的に位置づけられ得るのである。そのことは、ただちに、「くり返し」の②・③・④・⑥の指示する事実性と、①と⑦—⑧の指示する事実性との意味の相違をうかがわしめる。

「くり返し」の②・③・④・⑥はたぶん下図のように『告白』第Ⅶ巻と対応するのだろう。



しかし恐らく「くり返し」の①と⑦—⑧は次頁の図のように対応するのではないか。もっとも、全三巻の『自由意志論』が文字通り三分されるのに比べて、『告白』第



Ⅶ巻はそのように三分されるとは限らないので、以下に『告白』第Ⅶ巻の構成を検討する必要がある。『自由意志論』の《くり返し》①と⑦—⑧がその際導きの糸となる。『自由意志論』は《くり返し》①の「信じなければ理解しないだろう」という宣言とそれに引き続く悪の探究によって、きわめて規則的に、三分されたのであった。(『自由意志論』第Ⅲ巻の《くり返し》の有無について、私にはそれを肯定的に確認するための論証の用意がある。)『告白』第Ⅶ巻にはそのように定式化された宣言はないが、しかし既述したように事実としてのまず信じて次に理解することがあると言えるのである。

そこで神の不可滅性についての記述を指標として『告白』第Ⅶ巻を区分してみよう。

(1) ①～⑦：神の不可変性に対する信念。悪の探究。神の不可侵性への言及。(2) ⑧～⑭：神は不可滅でなければならない。悪の探究。教えの規範への言及。(3) ⑮～⑳：悪の探究と神への信仰との葛藤。不可変の光としての神の発見。悪は存在ではない。不義とは意志の錯倒である。

以上の区分には難点がある。第二部の⑧が必ずしも信仰対象としての神の不可滅性について述べたものでないということは比較的小きな難点だと言えるだろうが、第三部の「不可変の光としての神の発見」の構成的な意味について、第一段階：信仰、第二段階：理解という線で容易に説明することができないということは大きな難点だと言うべきだろう。「神の発見」は第一段階：信仰に属するのだろうか。しかし「神の発見」は神への信仰とは異なっている。「神の発見」は、では、悪の探究の一環なのだろうか。だが、その場合、悪の探究のどのような一環なのかがわからない。

「神の発見」はなぜここに位置しているのか。

思えばあたかも、神は在る、悪はない、というかのごとくに、「神の発見」と「悪は存在ではない」は隣り合っている。それでは第一段階：信仰表明、第二段階：理

性的探究・理解という順序の《くり返し》の線でも、むしろ第一段階：神の探究——それは信仰でも理解でもまた発見でもかまわない——と第二段階：悪の探究という順序の《くり返し》の線で読んでいくべきなのではないか。神の探究と悪の探究はそのように交互に照らし合って深められているのではないか、という見方が思い浮かぶ。

そしてこの新しい見方は実際かなりよく『告白』第Ⅶ巻の文脈を説明するものようである。「神の発見」の構成的な意味と、『自由意志論』の《くり返し》①と⑦—⑧の指示する事実性の残された意味とが、それとともに照明される。

(1) VII, i, 1; 2. 神の不可変性に対する確信。神についての形体的思念 (cogitare)。  
 (2) VII, ii, 3. マニ教的な悪の理解に対するネブリディウスの論駁。マニ教的な悪の理解は神の不可侵性と抵触する。(1) VII, iii, 4. 神の不可変性に対する信念。(2) VII, iii, 4; 5. 悪の原因の探究。(1) VII, iv, 6. 神は不可滅でなければならない。(2) VII, v, 7. 悪の探究。(1) 神についての形態的想像。(2) 悪の探究。(1) 教えの規範への言及。……VII, vii, 11. 悪の探究と神の探究との相克・葛藤・動揺。…(1) VII, x, 16. 不可変の光としての神の発見。(2) VII, xii, 18. 悪は存在ではない。(1) VII, xiii, 19. 被造物全体としての見地から神は讃えられる。(2) VII, xvi, 22. 不義とは意志の錯倒である。

それらはひとつながりの探究である。

『自由意志論』の論証過程において別々の構成要素として登場した「神の存在証明」と「信じなければ理解しないだろう」と「悪の解明」とは、アウグスティヌスの《くり返し》の『告白』第Ⅶ巻における形態において、波のうねりの連続性のような、ひとつの生命の Dynamismus を示しているように思われる。

それらを連続させているものは何か、という問いを私はここで提起したい。

「神の発見」と「悪の解明」とは何故関連するのか。

『告白』第Ⅶ巻において検討する限り、そのような交互の探究、交互の到達を可能にしているものは substantia の概念であるという答えが返ってくると言えるように思う。substantia に対するアウグスティヌスの理解の連続的な推移を、VII, i, 1. と VII, x, 16. の対比によって浮かび上がらせてみる。

この二つの箇所が目とその目の見るものとの関係において proportional であると

いう点が対比の眼目になる。すなわちその青年時代が死に絶え、壮年時代に入って行ったところのアウグスティヌスは、*aliquid substantiae* については、肉眼で (*per hos oculos*) 見慣れているものしか思い浮かべることができなかった。それ故神についても、たとえ人間の体の形によってではないにせよ、何かしら形体的なもの (*aliquid corporeum*) として思い浮かべざるを得なかったのである (以上 VII, i, 1.)。とは言え神が在り、神の存在 (*tua substantia*) が、不可侵的であり (VII, iii, 4.), 不可滅的であって (VII, iv, 6.), そして不可変的である (VII, vii, 11.) ことに対する確信・信念・信仰は、悪の探究が行きずまり、葛藤して、動揺するときにも、ゆるがなかった (VII, vii, 11.)。がしかし、その *substantia* 自身が何であるかは、こう言ってよければ、アウグスティヌスにとっていまだ不明であったろう。(この点の理解は、『自由意志論』第Ⅱ巻における「信じなければ理解しないだろう」と、あたかも不確かでまったく認識されていないことがらとしての (II, ii, 5.) 神の存在証明ないし存在探究と、の関係の理解に資するところがあるように思う。) そして VII, x, 16. において魂の目 (*oculus animae*) が開かれていく過程に対応して、*substantia* に対する理解が開かれていく。その目は、のちほど (VII, xvi, 22.) 至高の存在 (*summa substantia*) と呼ばれるだろうものの不可変の光を見るにいたるのである。

アウグスティヌスは、恐らく、そのような曲折をへたのちに発見された至高の存在の不可変の光に照らされて (IV, xv, 25. 参照), 悪は存在ではないという存在論的な見地に (*oculus animae*) の見地に到達したにちがいない。

そしてその同じ不可変の光に照らされてアウグスティヌスは不義とは意志の錯倒であるとも記したはずである。

この存在 (*substantia*) とは何か。

#### 4. 『自由意志論』それ自身の中の《くり返し》の意味の再検討

「神の発見」と「悪の解明」とは何故連関するか、という最後の問いかけを、『自由意志論』の文脈に立ち帰って試みたいと思う。

⑦—⑧の《くり返し》をしてみる。

第Ⅰ巻における悪の解明、それは最も基本的な意味で、「悪しく為すこと」の存在秩序における位置付けであると言えよう。第Ⅱ巻における自由意志の解明、それ

は中間的な善 (*media bona*) としての自由意志自身の(運動の)存在秩序における位置付けである。アウグスティヌスは、存在秩序において、一方で悪しく為すことを、他方で自由意志それ自身を、位置付けることによって、それらへの問いかけに答えているように思われる。

その論理の動きを私は、存在秩序への位置付けという点で、くり返しとしてとらえ、《くり返し》⑦—⑧と呼んだ。

その内容——悪しく為すとは不可変な善から反転して可変的な善へと転向することである。私たちは(中間的な善としての)自由な意志の決定からして悪しく為す——は図式的に書いて示すこともできる。それが悪の問題におけるアウグスティヌス的な探究全体の正確な写しであるのかと問うことの以前に、なるほどいかにもそれは外的・図式的な探究の写しであると言うこともできよう。探究それみずからの位置から離れて、私たちは確かに見ているだけだという印象が生じるかもしれない。がしかし、他方、そこには先にアウグスティヌス的な方法における探究の姿として示された「神の発見」と「悪の解明」とのわかちがたい連関が、論理の形として、示されていると言える場面もあるのでないか。

——存在秩序において、自由な意志決定を介して、互いに連関している不可変な善からの反転と可変的な善への転向。

それらは何故連関するのか。

ここで⑤の《くり返し》(と私がみなすもの)の検討に入る。Ⅲ巻全体に亘るそれぞれの内容の要約は、I, xiv, 30: 幸福な生を意志することとそれに値すること, II, ix, 26: *bonum* への欲求 (*adpetere*) と迷い, III, vii, 20: 存在することへの意志と至高なるものへの接近, としてよかろう。

第一の共通場面として私が取り出すそれぞれ異なった文脈において、私たちが常に端的に何かを意志し求めている姿が浮かび上がってくる。第Ⅰ巻においては幸福な生を、第Ⅲ巻においては在ることそれ自身を、そしてとりわけ第Ⅱ巻においては *bonum* (と見えるもの) を、私たちは欲し求めていると言われる。

「というのは、あなたがさまざまなものを追い求める人たちとして言及した人々はすべて善 (*bonum*) を求め、悪 (*malum*) を避けるのです、が異なったものが異なった人に善と見えるために、彼らはさまざまなものを追い求めます。」



そこには悪はない。欲し求められる「私」にとっての悪、「私」が「私」の生の道において欲し求める悪は、ないのである。それは光を錯倒した仕方<sup>・</sup>で証示するものではないだろうか。それを私は、*mihi omnino non est malum.* と呼びたい。

そして第二の共通場面として私<sup>・</sup>が取り出すそれぞれの文脈において、各巻は共通の転換する道 (*via*) の存在を指し示し合っているように思う。第 I 巻においては *velle* から *mereri* ないし *recte velle* へ、第 II 巻においては *adpetere* から *adpetere debere* へ、第 III 巻においては *eligere* から *recte eligere* ないし *velle debere* へ、という転換が指し示すと私が考えるものは、内的超越を通じた道の存在である。

悪とは何か。

そして途上にあるものを除いて、悪とは何かと問い求めることがどうしてできるだろうか。「神の発見」と「悪の解明」とが連関するその道において、至高の善の *lux interior* (II, viii, 23.) の輝きに比べての「私」の善、欲し求められる「私」にとっての善は、むしろ闇であり、悪であると言うことができるのではないか。悪は *mihi omnino non est malum.* と私が呼びたい地点においてなく、*et tibi omnino non est malum,* とアウグスティヌスが呼んだ (Conf. VII, xiii, 19.) 地点においてなく、ただこれら二つのことが言われる共同の途上においてのみ在るとも言えようか。

内的超越をへて至高の善 (*summum bonum*) へと続く存在の道、そして恐らくは「私たちの自由」(II, xiii, 37.) 「真の自由」(I, xv, 32.) とアウグスティヌスが呼んでいたものとも同一であるように思われる超越への可能性、それこそが、悪の問題におけるアウグスティヌス的な探究の方法において、「神の発見」と「悪の解明」とを一つに連関させているものであったと私は結論する。

外的・図式的な連関によるのではなくして、内的連関によって、途上存在である私たち (*in via sumus.* II, xvi, 41.) は在る (*esse*) から生きる (*vivere*)、生きるから知る (*intellegere*) へと転換する存在の道の大きな転換点において、自己みずからの私有 (*privatum*) と固有 (*proprium*) を乗り越え、共通に (*communiter*) かつ公的に (*publice*) 開かれていかねばならないように思われる。

## 註

以上の論述をなすに当たって、一般的には、次の文献を参照した。

R. Jolivet: Le problème du mal chez saint Augustin, *Etudes sur saint Augustin* VII-II, 1930.

F. J. Thonnard: Introduction, traduction et notes, Dialogues philosophiques III, *Bibliothèque Augustinienne* 6, 1952.

A. Solignac: Introduction et notes, *Les Confessions*, *Bibliothèque Augustinienne* 13-14, 1962.

J. J. O'Meara: *The Young Augustine*, London, 1965.

Jolivet の研究からは、或る特殊な観点からの独自の断面を学んだというよりも、悪に関する総括的な問題場面を学んだ。O'Meara の研究からは、特に P. Courcelle を念頭においた、アウグスティヌス的な叙述の歴史性をめぐる問題場面を学ぶと同時に、Chapter XII が含むものと同内容の Arripui, aperui, et legi. (*Augustinus Magister* I, 1954.) において、「犯罪者は犯行現場にもどる」ということわざのおもしろい適用を学んだ。

substantia の概念については、

主として、

J. F. Anderson: *St. Augustine and Being*, The Hague, 1965. の特に Chapter III を参照した。

そして「悪は substantia ではない」という命題の意味については、

山田 晶:「アウグスティヌスにおける悪の問題」、『理想』469, 1972. を参照した。その主題を「発展の相において」位置づけるものとして同著書の、「罪と悪」、『カトリック神学』第十二号, 1967. があると言えるように思う。いずれもプロティノスとの比較を含んでいるが、この問題に焦点をしばったものとして、

J.-N. Bezançon: Le mal et l'existence temporelle chez Plotin et saint Augustin, *Recherches Augustiniennes* III, 1965. を参照した。この論文では私のアウグスティヌス的な「くり返し」をアウグスティヌス的な習慣とまで呼ぶことはできなかったけれども、Bezançon の研究からは、つとに稲垣良典先生から注意を喚起せしめられていた、悪の問題における習慣論のひとつの形態を学んだ。

『自由意志論』の存在論的な個別研究を含むものとして、

E. Z. Brunn: *Le dilemme de l'être et du néant chez saint Augustin*, *Etudes Augustiniennes*, 1969. を参照した。また、

G. Bardy: Les méthodes de travail de Saint Augustin, *Augustinus Magister* I, 1954. など一応参照したが、この論文との直接的な関連はない。